

「いつも」と「常に」の意味

大塚 貴史

キーワード：「いつも」、「常に」、「始まりの時点」の制約、例外の許容、「恒常性」

要 旨

現代日本語の副詞「いつも」と「常に」について、先行研究では、事態が生起する期間の「始まりの時点」に制約があることが指摘されている。加えて、「いつも」は例外を許容することがあり、「常に」は「恒常性」を暗示すると指摘されている。しかし、いずれの指摘についても検討の余地がある上に、両者の意味との関係（現象の要因）も不明瞭のままである。これに対し、本稿では、「いつも」は生起時や生起回数を問わず、話し手による複数回の認識の中で同じ事態が確認されることを表し、「常に」はある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても当該事態に変化がないことを表すということを明らかにし、先行研究の指摘がいずれもこれらの意味から説明可能であることを主張する。

1. はじめに

一般に、現代日本語の副詞「いつも」と「常に」は類義表現とされている。それは、一般向けの国語辞典において、「いつも」については「常に」を、「常に」については「いつも」を用いた説明が施される場合があることから見て取れる。例えば、次の(1)と(2)はそれぞれ『明鏡国語辞典 第二版』における「いつも」と「常に」の語釈である。

- (1) 時と場合にかかわらず（または、ある条件の下で）、常に物事が成立するさま。いかなる時も。どういう場合も。¹

¹ 文献やコーパスから引用した例文などの末尾にはその出典を記す（出典のない例文などはいずれも筆者によるもの）。また、引用した例文の判定記号（「*」「??」など）はいずれも引用元の文

（『明鏡国語辞典 第二版』「いつも」、下線は筆者）

(2) いつも。たえず。

（『明鏡国語辞典 第二版』「常に」、下線は筆者）

先行研究でも、「いつも」と「常に」が共通する特徴を持つことを論拠として、両者が共にひとつの意味を表すと指摘するものがある（2.1.1 節にて詳述）。しかし、その共通する特徴は両者の振る舞いを適切に捉えたものではなく、その点で両者が共にひとつの意味を表すとする指摘には検討の余地がある（2.1.2 節にて詳述）。

一方で、「いつも」と「常に」が異なる特徴を持つことを指摘する研究や、両者の意味的相違点を明示的に述べる研究もある（2.2.1 節と 2.3.1 節にて詳述）。しかし、前者の研究は現象の指摘に留まり、後者の研究は両者の振る舞いを十分に説明できるだけの意味を示せているとは言えない（2.2.2 節と 2.3.2 節にて詳述）。これに対し、本稿では、「いつも」と「常に」が次のような意味を持つこと（特に下線部）を主張し、先行研究で指摘されている現象がいずれもこの意味から説明可能であることを明らかにする。

- (3) 「いつも」は、生起時や生起回数を問わず、話し手による複数回の認識の中で同じ事態が確認されることを表す。
- (4) 「常に」は、ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても、当該事態に変化がないことを表す。

2. 先行研究の指摘と問題の所在

議論に先立ち、まずは「いつも」と「常に」の共通点と相違点に関する先行研究の指摘を概観し、問題の所在を明らかにする。以下、両者の共通点を指摘する研究として仁田（2002）を、相違点を指摘する研究として森田（1989）、飛田・浅田（1994）、佐藤（2017）を取り上げる。

2.1 「いつも」と「常に」に共通する意味と特徴に関する指摘について

2.1.1 仁田（2002）の指摘

仁田（2002）は、「いつも」と「常に」を「頻度の副詞」のひとつに位置付けるが、

献に倣ったものである。

その中でも特に両者について次のように指摘している²。

- (5) 「イツモ」や「常に」は、事態が継続していることを表しているわけではない。問題になる間隔・インターバルのどれを取ってみても、事態が存在していることを表しているのである。(仁田 2002: 265)

例えば次の場合、「週末」という生起間隔を作り出す語句が出現しており、その生起間隔のどれを取ってみても、事態が生じ存在していることを表している」(仁田 2002: 265) とされる。

- (6) ある別荘地の朝。林のなかの小道を、エヌ氏はひとりで散歩していた。彼は大きな会社の経営者だが、週末はいつも、この池でくつろぐことにしているのだ。(星新一『ボッコちゃん』、仁田 2002: 265、傍点を波線に改変)

(5) のうち、「事態が継続していることを表しているわけではない」という記述は、「事態の存続時間量大であること」(仁田 2002: 230) を表す「ずっと」との相違点を踏まえたものである。例えば、次の (7a) と (7b) は「ともに、ある時間幅を事態が継続して一切れ目なく一占めているように見える」(仁田 2002: 264) が、(8) の各例の容認度の差から、「いつも」と「常に」は「ずっと」と同じ意味を持つものではないと指摘している。

- (7) a. 「そういう風に生きたいといつも考えています。いっぱいいろんな事があつ

²仁田 (2002) は、「頻度の副詞」を「頻度性の高さ」(仁田 2002: 263) から①「いつも」「常に」、②「高頻度を表す副詞」、③「中頻度を表す副詞」、④「低頻度を表す副詞」に分ける。このうち②③④に属する副詞は次の文における下線部のようなものであり、いずれも「一定期間における事態の回数の多寡」(仁田 2002: 267)、あるいは「間隔の時間的隔たりの短さ・長さを表している」(仁田 2002: 267) とされる (i) の「よく」は②に、(ii) の「しばしば」は③に、(iii) の「時たま」は④に属する)。

(i) 石上は職業柄、よく本を読む。(斎藤栄『江の島悲歌』、仁田 2002: 268)

(ii) 折口信夫は、民俗資料採集のためしばしば山間離島を旅した。

(大岡信『折々の歌』、仁田 2002: 269)

(iii) 千登世は時たまだしぬけに訊いた。

(嘉村磯多『崖の下』、仁田 2002: 271)

これに対し、①の「いつも」と「常に」は「間隔の時間的隔たりには関わらない」(仁田 2002: 267) とされ、両者は他の「頻度の副詞」とは「タイプの異なった」(仁田 2002: 267) ものと位置付けられている。

ても、取り込み方によって、どんどん幸せになれるから」

（『アエラ』1993年5月25日、仁田2002:264）

- b. そういう風に生きたいとずっと考えています。 （仁田2002:264）
- (8) a. さきほどからそういう風に生きたいとずっと考えています。
（仁田2002:265、実線の一部を波線に改変）
- b. さきほどからそういう風に生きたいといつも考えています。
（仁田2002:265、実線の一部を波線に改変）
- c. 少年の頃からそういう風に生きたいといつも考えています。
（仁田2002:265、実線を波線に改変、実線は筆者）

ここから、仁田（2002）は「いつも」と「常に」には次のような制約（以下、「始まりの時点」の制約）があると述べている。

- (9) 「イツモ」が存在しながら適格であるためには、〔筆者略〕間隔を置きながら一事態が生じていない時間を含みながら一事態が複数回生じ存在しうるほど、始まりの時点が離れていなければならない。
（仁田2002:265、下線は筆者）

なお、(9)では「いつも」についてのみ言及されているが、仁田（2002）では一貫して「いつも」と「常に」が区別されていないため、この指摘は「いつも」と「常に」の相違を示すものではないと推察される。

2.1.2 仁田（2002）の問題点

しかし、仁田（2002）の指摘のうち、特に「始まりの時点」の制約に関する指摘には問題がある。確かに、前掲（8ab）の「さきほどから（発話時まで）」という時間幅と前掲（8c）の「少年の頃から（発話時まで）」という時間幅を比較すると後者の方が長いため、「（そういう風に生きたいと）考える」という事態が複数回生起する可能性は後者の方が高いように思われる。例えば、次のように「事態生起の回数を多い回数として捉え」（仁田2002:278）る「何度も」を用いた場合、（10a）の容認度は（10b）に比してやや低い³。

³（10a）の例を問題なく容認する話者も存在すると考えられる。しかし、その場合、（8b）は「さきほどから（発話時まで）」が「（そういう風に生きたいと）考える」という事態が複数回生起し

- (10) a. さきほどからそういう風に生きたいと何度も考えています。
b. 少年の頃からそういう風に生きたいと何度も考えています。

しかし、「事態が複数回生じ存在しうるほど」の時間幅を設けても「いつも」が不適格になる場合がある。例えば、次の(11)が問題なく容認されるように、「昨日から(発話時まで)」という時間幅において「電話を掛ける」という事態が複数回生起することは十分に想定され得るが、「いつも」と「常に」を用いた(12)の容認度は低い。

- (11) 昨日から何度も電話を掛けている (のに、繋がらない)。
(12) a. 昨日からいつも電話を掛けている (のに、繋がらない)。
b. 昨日から常に電話を掛けている (のに、繋がらない)。

仁田(2002)は、「いつも」と「常に」が前掲(5)のような意味を持つということについて、この「始まりの時点」の制約を論拠としている。しかし、「始まりの時点」の制約が両者の振り舞いを適切に捉えていないことから、(5)には検討の余地があると言える。

2.2 「いつも」の意味に関する指摘について

2.2.1 森田(1989)と佐藤(2017)の指摘

一方、森田(1989)は「いつも」と「常に」を異なるものとして扱っており、このうち「いつも」について次のように述べている。

- (13) a. 「いつも」は本来、話し手が意識する任意の場合に、対象が例外なく同じ状況であることを指し、それが「いつでも……だ」の気持ちとなる。
(森田 1989: 144)
b. 実際は常によそ見をしているわけではなくても、たまたま話し手が気をつけるたびごとによそ見をしていれば、「お前はいつもよそ見をしている」となる。
(森田 1989: 145)

得る時間幅を持っているにもかかわらず、「いつも」が不適格になっているということになる。これは仁田(2002)が主張する「いつも」の制約(「始まりの時点」の制約)に検討の余地があることを示すものであり、結果的に本稿の主張に合致する。

また、佐藤（2017）は次の（14）のように述べ、（15b）のような場合には「いつも」と「常に」の適格性に差があることを指摘している。

- （14） 「いつも」に関しては、「複数の事態」とも言うべき特徴があるようである。
すなわち、複数の事態に基づいて述べている場合に自然である。

（佐藤 2017: 5）

- （15） a. 現役時代、ペレには {いつも／常に} 屈強なディフェンダーがついていた。

（佐藤 2017: 5、実線は筆者）

- b. その試合中、ペレには {?いつも／常に} 屈強なディフェンダーがついていた。

（佐藤 2017: 5、実線は筆者）

特に（15a）について、佐藤（2017）は「ある選手の現役時代に出場した数多くの試合（すなわち複数の事態）に基づいて述べて」（佐藤 2017: 5-6）いるとしていることから、佐藤（2017）が「複数」と捉えているのは、（15a）で言えば「現役時代（に出場した試合）」（波線部）であると言える。つまり、佐藤（2017）の指摘は次のように言い換えることができる。

- （16） 「いつも」は、ある事態が複数の時点や期間において生じる場合に用いられる。⁴

2.2.2 森田（1989）と佐藤（2017）の問題点

森田（1989）による前掲（13）の指摘のうち、「話し手が意識する任意の場合」は、仁田（2002）の言う「問題になる間隔・インターバル」に相当する。また、その場合に「対象が例外なく同じ状況であることを指」すという点は、仁田（2002）が「（問題になる間隔・インターバルの）どれを取ってみても、事態が存在していることを表」すとする指摘と一致している。一方、佐藤（2017）が挙げる前掲（15a）の「現役時代（に出場した試合）」も、仁田（2002）の言う「問題になる間隔・インターバル」に相当する。佐藤（2017）は「いつも」が適格になる場合はこれが「複数」であ

⁴佐藤（2017）は（15b）について、「一つの試合における攻撃と守備のせめぎ合いの場面の一つ一つを独立した事態と考えれば、『いつも』が自然に使われる可能性もあるだろう」（佐藤 2017: 6）と述べている。これは、「複数」の「攻撃と守備のせめぎ合いの場面」が問題にされていることに起因すると考えられる。

必要があると述べるが、仁田 (2002) の「問題になる間隔・インターバルのどれを取ってみても」という記述も、「問題になる間隔・インターバル」が複数必要であることを暗示しているように読める。つまり、森田 (1989) と佐藤 (2017) による「いつも」に関する前述の指摘は仁田 (2002) の指摘と概ね共通しており、「いつも」の意味や特徴をより具体的に、あるいは明示的に述べたものとして位置付けられる。これらの指摘に則って先行研究が指摘している「いつも」の意味をまとめると、次のようになる。

- (17) 「いつも」は、話し手が複数回意識する任意の場合に、対象が例外なく同じ状況であることを表す。

しかし、「いつも」が (17) のような意味を持つとしても、2.1.2 節で指摘した「始まるの時点」の制約の問題については依然として説明がつかない。また、(17) は話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起 (例外) が確認されなければ「いつも X」が成立するというを示す。しかし、佐藤 (2017) は次のように述べている。

- (18) a. 前の月に週二回のペースで学校に遅刻した 高校生の娘がいたと仮定しよう。(1) [筆者注：本稿での (18b)] はそのような娘に対する母親の発話としてごく自然なものである。 (佐藤 2017: 3、下線は筆者)
- b. あなた、いつも学校に遅刻してどうするの。
(佐藤 2017: 3、傍点を下線に改変)

(18) は「いつも」が次のように振る舞うことを示すが、これは (17) が示す「いつも」の振る舞いとは一致しない。

- (19) 「いつも X」は、話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起 (例外) が確認されても成立する。⁵

⁵ この点については「言葉の緩い用法 (loose use)」(Sperber & Wilson 1995: 286) が関わっている可能性もないとは言いきれない。Sperber & Wilson (1995) は、「関連性理論」に基づき、「思考の最適な解釈的表現は、聞き手にその思考について処理するに値するだけの関連性がある情報を与え、できるだけ処理労力が少なくすすむようにしなくてはならない」(Sperber & Wilson 1995: 284) と述べている。例えば、月 797 ポンド 32 ペンスの収入があると仮定した場合、友人に現在の収入を尋ねられた際に、次の (iv) のように「厳密に字義的で事実在即した答え」(Sperber & Wilson

以上の点に鑑みれば、(17)は「いつも」の意味に関する記述として不十分である。

2.3 「常に」の意味に関する指摘について

2.3.1 森田 (1989) と飛田・浅田 (1994) の指摘

一方、森田 (1989) と飛田・浅田 (1994) には、「常に」の意味について次のような類似する記述が見られる。

(20) 「常に」は時間の流れに隙間がなく、継続していく状態である。

(森田 1989: 147)

(21) 一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ点にポイントがあり、恒常性の暗示がある。

(飛田・浅田 1994: 304)

ただし、飛田・浅田 (1994) については「恒常性の暗示がある」と述べている点で特徴的である。この点に関し、飛田・浅田 (1994) は次のような例を示している⁶。

(22) a. 二等辺三角形の両底角はつねに等しい。

1995: 284) と、(v) のように「字義性の度合が落ちて、厳密に言えば偽とわかっている」(Sperber & Wilson 1995: 284) 答えのどちらをも選択できるとしている。

(iv) I earn £797.32 pence a month. (月 797 ポンドと 32 ペンスです。)

(Sperber & Wilson 1995: 284、下線は筆者)

(v) I earn £800 a month. (月 800 ポンドです。)

(Sperber & Wilson 1995: 284、下線は筆者)

こうした「関連性理論」の考えに則して言えば、例外が存在していても「いつも」が用いられ得るのは、これが「緩い用法 (loose use)」で用いられていることによると捉えることも不可能ではない。しかし、後述するように、「いつも」との意味的な類似性が指摘されている「常に」はそのような場合には用いられない。この点を踏まえれば、「いつも」の振る舞いは「緩い用法 (loose use)」ということのみでは十分に説明し切れないと言える。なお、佐藤 (2017) は、「いつも」と「常に」に限らず、「母語話者が、ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている諸形式」(佐藤 2017: 3) には例外の存在を許容するものと許容しないものがあると指摘する。前者の例としては「いつも」「みんな」「ばかり」が、後者の例としては「常に」「全員／全部」「だけ／しか」が挙げられている。このうち、佐藤 (2017) は特に「ばかり」について議論し、この形式が例外の存在を許容する要因について考察している(「ばかり」に関するこの現象自体は、数多くの研究において指摘されている(寺村 1981; 菊地 1983; 沼田 1992; 定延 2001 など))。また、「みんな」と「全員」にこうした差が生じる要因については大塚 (2020) で考察した。

⁶次のように、佐藤 (2017) にも飛田・浅田 (1994) と類似する指摘が見られる。

(vi) 「常に」の場合は、[筆者略] 事態の経験とは切り離された不変の真理を述べる場合にも自然に使われる。

(佐藤 2017: 6)

(vii) 三角形の内角の和は {??いつも／常に} 180 度だ。

(佐藤 2017: 6、下線は筆者)

(飛田・浅田 1994: 303、下線は筆者)

b. *二等辺三角形の両底角はいつも等しい。

(飛田・浅田 1994: 304、一部略⁷、下線は筆者)

以上の森田 (1989) と飛田・浅田 (1994) の指摘を重ねると、「常に」の意味は概ね次のようにまとめられる。

(23) 時間を空けずに同じ状態を継続的に保つ様子を表し、恒常性を暗示する。

2.3.2 森田 (1989) と飛田・浅田 (1994) の問題点

前掲 (23) は、「常に」に「継続」という含意があることを示す。仁田 (2002) は「常に」について「事態が継続していることを表しているわけではない」(前掲 (5)) と述べていたが、2.1.2 節で指摘した通り、その論拠とされる「始まりの時点」の制約に検討の余地があるため、一概に (23) を否定することはできない。しかし、(23) は「常に」に「始まりの時点」の制約があることについて十分な説明を与えることができない。

また、「常に」が暗示するとされる「恒常性」についてはより精緻な説明を施す必要がある。飛田・浅田 (1994) は、「恒常性」を「一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ」という意味で用いていると推察される (前掲 (21))。確かに前掲 (22a) はそのような意味を表し得る環境にあると言えるが、その点で共通していると考えられる次の文では、「常に」は不適格である。

(24) ??クジラは常に哺乳類だ。

以上の点に鑑みれば、(23) は「常に」の意味に関する記述として不十分である。

2.4 問題点の整理

⁷ (22b) は、飛田・浅田 (1994) では次のように提示されている。

(viii) *二等辺三角形の両底角はいつも (たえず) 等しい。(飛田・浅田 1994: 304、下線は筆者) これは、「常に」と「いつも」のみならず、「常に」と「絶えず」にも「恒常性」という点での相違が認められることを示すものであるが、「絶えず」を含めた議論は今後の課題とし、本稿では立ち入らない。なお、飛田・浅田 (1994) は「使えない用例」(飛田・浅田 1994: xiii) に「×」を付しているが、ここではその「×」を便宜的に「*」に改めている。

以上、「いつも」と「常に」の意味に関する先行研究の指摘を概観し、併せてその問題点を示してきたが、ここで改めて整理しておく。

まず、「いつも」の意味については、仁田（2002）が前掲（5）のように指摘しており、それは森田（1989）と佐藤（2017）の指摘を重ねることで導かれる前掲（17）においてより具体的、あるいは明示的になっている。しかし、仁田（2002）が指摘する「始まりの時点」の制約が十分に明らかにされておらず、その点で「いつも」の意味には検討の余地がある。また、佐藤（2017）が指摘するように、「いつも」は例外を許容し得るが、その要因は明らかにされていない。

次に、「常に」の意味については、特に「継続」を表すか否かという点で仁田（2002）による（5）の指摘と森田（1989）と飛田・浅田（1994）の指摘から導かれる前掲（23）に相違が見られる。このうち仁田（2002）は、「始まりの時点」の制約を以って「常に」が「ずっと」とは異なることを示し、「常に」は「継続」を表すものではないと述べている。しかし、前述の通り、その「始まりの時点」の制約が十分に明らかにされていないことに鑑みれば、仁田（2002）による（5）の指摘には検討の余地がある。一方で、森田（1989）と飛田・浅田（1994）は「常に」が「継続」を表すとするが、不明瞭ながらも「常に」には「始まりの時点」の制約がある点で「ずっと」と異なることに鑑みれば、「常に」の意味を（23）のように記述するだけでは十分でない。また、飛田・浅田（1994）は「常に」が「恒常性を暗示する」と述べるが、その説明も現象を適切に捉えているとは言い切れない。

以上より、「いつも」と「常に」の意味を捉えるためには、主に次の4点を明らかにすることが求められると言える。

- (25) a. 「始まりの時点」の制約の実態と要因
- b. 「いつも」が例外の存在を許容する要因
- c. 「常に」と「ずっと」の相違
- d. 「常に」が表すとされる「恒常性」

次節以降では、これらの点を検討することを通じて「いつも」と「常に」の意味について考察する。

3. 「いつも」の意味について

3.1 「始まりの時点」の制約の再検討

3.1.1 仁田 (2002) の示唆

まず、仁田 (2002) が指摘する「始まりの時点」の制約について改めて検討する。前述の通り、仁田 (2002) は次の (26) と (27a) における「いつも」の適格性の差を通じ、「いつも」には「事態が複数回生じ存在しうるほど、始まりの時点が離れていなければならない」(前掲 (9)) という制約があるとしているが、2.1.2 節では (27b) の「いつも」が不適格であることを示し、仁田 (2002) の指摘に問題があることを指摘した。

(26) 少年の頃からそういう風に生きたいといつも考えています。 (= (8c))

(27) a.??さきほどからそういう風に生きたいといつも考えています。 (= (8b))

b.??昨日からいつも電話を掛けている (のに、繋がらない)。 (= (12a))

一方で、「いつも」が不適格である (27) の「さきほどから」と「昨日から」は、少なくとも「いつも」が適格である (26) の「少年の頃から」に比して「始まりの時点」が発話時に近いことは確かである。このことから、仁田 (2002) が指摘する「いつも」の制約のうち、「始まりの時点が(発話時から)離れていなければならない」という点については妥当であると考えられる。つまり、「いつも」には次のような特徴があると言える。

(28) 「いつも」は、「始まりの時点」が発話時に近い場合は用いられにくい。

以下では、「いつも」がこうした特徴を持つことを踏まえて「いつも」の意味について検討する。それに当たり、これと同様の特徴を持つことが指摘される「ことがある」に関する先行研究の指摘を参照する。

3.1.2 「ことがある」と「時間詞」の共起制約

工藤 (1989)、池田 (1996)、渡辺 (2009) などでは、経験を表す「ことがある」について、発話時から遠い時点や期間を示す表現とは共起可能であるのに対し、発話時に近い時点や期間を示す表現とは共起しにくいことが指摘されている。例えば、池田 (1996) は次のような例を挙げる。

- (29) きみはたしか ずっと前に/*先週 流感にかかったことがあるな
(池田 1996: 12、下線は筆者)

この現象が示すことについて、先行研究ではいくつかの指摘がなされているが、その中で、渡辺（2009）は次のように指摘している。

- (30) 「XはVしたことがある」構文は、「XがVする」というイベントの発生がゼロではない、即ち「XがVする」という出来事が今までに必ず発生しているということを述べる構文なのである。〔筆者略〕そしてこの構文は、そのイベントがいつ発生したか、すなわちそのイベントが時間軸上のどの位置（時点）に置かれるかということは問題にしない構文なのである。
(渡辺 2009: 86-87、下線は筆者)

渡辺（2009）によれば、「時点という概念は、唯一、イベントを特定化できるものである」（渡辺 2009: 87）が、『XがVする』というイベントの発生がゼロではないことを表すこの構文〔筆者注：「XはVしたことがある」構文〕に、イベントを特定化する機能をもつ時間詞が入ると、構文が表す意味機能（不特定で非指示的なそのイベントの発生がゼロではないということ）と時間詞が表す意味機能（どの時点で起きたイベントかを特定し、一つに絞ること）が相成れなくなり、不自然さを招く」（渡辺 2009: 87）とされる⁸。その上で、渡辺（2009）は特に発話時に近い時点や期間を示す「時間詞」（以下、「近過去時間詞」（渡辺 2009））について次のように述べている。

- (31) 近過去を表す時間詞は、それが表す時間幅が短いものが多く、厳密な時点表現と解釈されやすくなってしまう。そのため、近過去時間詞を用いると、時点表現でイベントを特定化することになってしまい、許容度が低くなるのである。
(渡辺 2009: 90、下線は筆者)

一方で、他の先行研究でも指摘されているように、「ことがある」は発話時から遠い時点や期間を示す「時間詞」（以下、「遠過去時間詞」（渡辺 2009））とは共起可能であるとされる。該当する用例としては次のようなものが挙げられている。

⁸ 渡辺（2009）は、『Vしたことがある』におけるV（イベント）が発生した時間を表す副詞的要素」（渡辺 2009: 94（注4））を一括して「時間詞」と呼称している。

- (32) a. 以前、横浜 FC 以外のチームの試合で当選したことがあるので、この手の抽選はある程度期待します。(朝日新聞デジタル⁹、渡辺 2009: 89、実線は筆者)
- b. 私もかつて、ニチイの西端社長にあることを尋ねられ、「知りません」というひと言がいえず知ったかぶりをし、あとで嘘がばれ、それこそ本当に恥ずかしい思いをしたことがある。

(甲斐良一『心の危機管理術』、渡辺 2009: 89、実線は筆者)

- (33) a. ぼくは高校生の時に、有名作家がやっているような「実存主義的」短篇小说をいくつか書いたことがある。

(朝日新聞デジタル、渡辺 2009: 89、実線は筆者)

- b. こういった聞いたことのない外国語の音声の発音については子供のころに聞いたことがあるかどうかよりは...

(朝日新聞デジタル、渡辺 2009: 89、実線は筆者)

「ことがある」が「遠過去時間詞」と共起可能である要因について、渡辺 (2009) は次のように指摘する。

- (34) 時間幅が広ければ、それだけ時点としての厳密性が薄れ、イベントを確実に特定して捉えることにはなりにくいのである。

(渡辺 2009: 89、下線は筆者)

例えば、(32) の「以前」「かつて」などは「過去をすべて含む表現であり、過去の具体的時点に言及するものではな」(渡辺 2009: 89) く、また (33) の「高校生の時」「子供のころ」などは「それが表す期間がかなり時間幅を有し、面的にそのイベントを包み込むようなもので、厳密なイベント発生時には言及しにくい」(渡辺 2009: 89) とされている。

3.1.3 「いつも」の意味特徴

前述の通り、「いつも」は「始まりの時点」が発話時から離れている、即ち時間幅が長い表現(「少年の頃から」とは共起可能であるのに対し(前掲(26))、「始まりの時点」が発話時に近い、即ち時間幅が短い表現(「さきほどから」「昨日から」と

⁹ <http://www.asahi.com>

は共起しにくい (前掲 (27))。この点について、「ことがある」に関する渡辺 (2009) の指摘 (前掲 (30)) を援用すれば、「いつも」は事態が「時間軸上のどの位置 (時点) に置かれるか」ということは問題にしない」と考えられる。ここから、「いつも」には次のような意味特徴があると指摘することができる。

(35) 「いつも」は、事態の生起時や生起回数を特定化しない。

なお、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から収集した「いつも」の用例には次のようなものが見られる¹⁰。

- (36) a. 最近仕事が本当に忙しいらしく、帰りがいつも 0 時を回っています。
(Yahoo!知恵袋 2005 年、下線は筆者)
- b. 近頃の尾瀬はいつも 満員で、前約なしには泊山地で、殆んど登山者の姿を見かけなかった。
(深田久弥『日本百名山』、下線は筆者)

(36) の「最近」「近頃」は事態生起時が発話時に近いことを示す。しかし、これらは「さきほどから」「昨日から」のように具体的な日時がある程度想起可能なものではなく、発話時に近い期間を漠然と指し示すものである。つまり、これらは渡辺 (2009) の言う「時点としての厳密性が薄れ」(渡辺 2009: 89) た表現であるため、「いつも」との共起が可能になっていると考えられる。

3.2 「いつも」が例外の存在を許容する要因

次に、「いつも」が例外の存在を許容する要因について検討する。前述の通り、佐藤 (2017) は次の (37) のように述べ、「いつも」が (38) のように振る舞うことを示唆している。

- (37) a. 前の月に週二回のペースで学校に遅刻した高校生の娘がいたと仮定しよう。(1) [筆者注: 本稿での (37b)] はそのような娘に対する母親の発話と

¹⁰ コーパス検索アプリケーション「中納言」(ver. 2.4.5) を用い、以下の条件で短単位検索を実施した。

(ix) キー : 品詞「代名詞」AND 語彙素「何時」
後方共起 (キーから 1 語) : 品詞「助詞-係助詞」AND 語彙素「も」

- してごく自然なものである。 (= (18a))
- b. あなた、いつも学校に遅刻してどうするの。 (= (18b))
- (38) 「いつも X」は、話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起 (例外) が確認されても成立する。 (= (19))

これには、前掲 (35) の「いつも」の意味特徴が関与していると考えられる。そもそも例外とは、ある範囲内において生起する事態がすべて同じというわけではない場合に生じるものである。例えば、10 回の認識のうち 10 回同じ事態 X が生起したという場合には例外はなく、8 回同じ事態 X が生起した (2 回は違う事態 Y であった) となれば例外があるということになる。つまり、例外というのは全体の回数や事態生起の回数が特定されて初めて問題になると言える。しかし、(35) に示した通り、「いつも」は事態の生起回数を特定化しないという特徴を持つため、そもそも例外の有無ということが問題にされない (例外という観点が馴染まない) のである。従って、「いつも」が例外を許容する要因は次のようにまとめられる。

- (39) 「いつも」は事態の生起回数を特定化しないことにより、例外の有無ということが問題にされないため、客観的に見れば例外が存在していても用いられ得る。

3.3 「いつも」の意味

以上の考察を踏まえると、「いつも」の意味は次のように捉えられる。

- (40) 「いつも」は、生起時や生起回数を問わず、話し手による複数回の認識の中で同じ事態が確認されることを表す。 (= (3))

本稿では特に (40) の下線部を明らかにしたが、それにより、先行研究で十分に説明されなかった現象、即ち「始まりの時点」の制約がある要因と例外の存在を許容する要因について説明を与えることが可能になったと言える。

4. 「常に」の意味について

4.1 「始まりの時点」の制約の再確認

次に、「常に」の意味について考察する。まずは、「始まりの時点」の制約について確認する。仁田（2002）は「常に」の「始まりの時点」の制約について明示的には述べていないが、仁田（2002）では一貫して「いつも」と「常に」がまとめて扱われているため、「常に」にも「いつも」と同様の制約があると捉えていると推察される。これは、次の（41）に比して（42）の容認度が低いことから示唆される。

(41) 少年の頃からそういう風に生きたいと常に考えています。

(42) a. ??さきほどからそういう風に生きたいと常に考えています。

b. ??昨日から常に電話を掛けている（のに、繋がらない）。 (= (12b))

3節では、「いつも」に「始まりの時点」の制約があるのはこの形式が事態の生起時や生起回数を特定化しないという意味特徴を持つことに起因しており、さらにその特徴が例外の存在を許容する要因にもなっていることを明らかにした。しかし、「常に」は例外の存在を許容しないことから、「常に」に「始まりの時点」の制約がある要因が「いつも」と同じであるとは考えにくい。従って、「常に」の「始まりの時点」の制約については「いつも」とは異なる観点から考察する必要がある。しかし、その点については一度措くこととし、以下では「常に」が表すとされる「恒常性」について検討し、それによって明らかにされる「常に」の意味を踏まえ、改めて「始まりの時点」の制約について考察する。

4.2 「恒常性」の検討

4.2.1 飛田・浅田（1994）の問題点

前述の通り、飛田・浅田（1994）は「常に」について、「一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ点にポイントがあり、恒常性の暗示がある」（前掲（21））と指摘して次の（43）の例を示しているが、同様のことを表し得る環境にある（44）においては、「常に」は不適格である。

(43) 二等辺三角形の両底角はつねに等しい。 (= (22a))

(44) ??クジラは常に哺乳類だ。 (= (24))

以下、この点について、頻度を表す副詞と「恒常的な状態」の関係に言及する矢澤（1987）の指摘を参照して考察する。

4.2.2 頻度を表す副詞と「恒常的な状態」の関係

矢澤 (1987) は、頻度を表す副詞について次の (45) のように述べ、それに関連して (46) (47) の例を挙げる。

- (45) 「いつも」や「しばしば」など頻度を表すB₃類は、恒常的な状態は修飾対象としないが、変化しえる状態ならば修飾対象にしえる^{原註7}。¹¹

(矢澤 1987: 7)

- (46) a. いつも優しいお母さん (矢澤 1987: 7、下線は筆者)
b. あの売店にはしばしば特売品がある (矢澤 1987: 7、下線は筆者)
- (47) a. ?いつも背が高いお母さん (矢澤 1987: 7、下線は筆者)
b. ?あの売店にはしばしば入口がある (矢澤 1987: 7、下線は筆者)

(45) では「恒常的な状態」が「変化しえる状態」と対比的に提示されていることから、矢澤 (1987) はこれを「変化し得ない状態」という意味で用いていると推察される。

4.2.3 「常に」の意味特徴

矢澤 (1987) の言う「恒常的な状態」か否か、即ち「変化し得ない状態」か否かという観点で次の例を観察すると、次の (48) と (49) はいずれも「変化し得ない状態」に相当する。

- (48) 二等辺三角形の両底角は等しい。
(49) クジラは哺乳類だ。

しかし、これらには「変化」のための条件を想定可能か否かという点において差があ

¹¹ 矢澤 (1987) は、「反復を表す連用修飾成分や出来事の成立のあり方を表す連用修飾成分など、一まとまりの動きや事態などを単位として修飾限定する連用修飾成分」(矢澤 1987: 1) について考察している。矢澤 (1987) はこれを「疊語形のオノマトペ副詞」「反復の連用修飾成分」「出来事の成立の連用修飾成分」「出来事の成立の様態を表す連用修飾成分」に分け、それぞれを A 類、B 類、C 類、D 類と呼称する。さらに、B 類の「反復の連用修飾成分」を「連続動作を表す連用修飾成分」「度数の連用修飾成分」「頻度の連用修飾成分」に下位分類し、それぞれを B₁ 類、B₂ 類、B₃ 類と呼称する。なお、B₃ 類の「頻度の連用修飾成分」の具体例としては「いつも」「時々」「しばしば」「まれに」が挙げられている。

る。(48)の場合、確かに理論上は二等辺三角形の両底角が等しくなくなるということはないが、図形を変更するなどして、その等しさを変えようと試みることは可能である。つまり、(結果的には両底角の等しさは「変化し得ない」が、「変化」のための条件を想定することは可能である。これに対し、(49)の場合、クジラが哺乳類でなくなるような条件は想定しにくい。このことは、次の(50)と(51)の容認度に差があることから示唆される。

- (50) 二等辺三角形の両底角はどのような場合でも等しい。
(51) ??クジラはどのような場合でも哺乳類だ。

こうした(48)と(49)の差と、前掲(43)と前掲(44)の「常に」の適格性の差を重ねると、「常に」には次のような意味特徴があることが導かれる。

- (52) 「常に」は、ある事態が変化する条件が想定可能な場合に用いられ得る。

4.3 「常に」の意味

前掲(52)のような意味特徴を持つ「常に」が前掲(48)の文で用いられた場合(前掲(43))、そこではまさに前掲(50)のようなことが表されると考えられる。つまり、「常に」の意味は次のように捉えられる。

- (53) 「常に」は、ある事態が変化し得る如何なる条件下にあつても、当該事態に変化がないことを表す。 (= (4)、波線加筆)

「常に」の意味をこのように捉えることで、前掲(42)の容認度が低いことについて説明を与えることができる。まず、(42a)の容認度が低いのは、「常に」が(53)の実線部の意味を持つことによる。つまり、「常に」と事態が生起する期間を示す表現が共起する場合は、その表現が当該事態に変化が生じ得る条件が成立するだけの時間幅を持つ必要がある。しかし、(42a)の「さきほどから(発話時まで)」は、「(そういう風に生きたいと)考える」という事態が変化し得る条件が成立するだけの時間幅を持っているとは考えにくく、そのために「常に」が不適格になる。4.1節では「常に」の「始まりの時点」の制約に関する検討を保留していたが、その制約にはこの(53)の実線部の意味が影響しているのである。

一方、(42b)の「昨日から(発話時まで)」は「電話を掛ける」という事態が変化し得る条件が成立するだけの時間幅は持っていると考えられる。それにもかかわらずこの文の容認度が低いのは、「常に」が(53)の波線部の意味を持つことによる。つまり、「電話を掛ける」という事態が「昨日から(発話時まで)」という時間幅において変化しないということが不自然なのである。

なお、(53)のうち、波線部は「ずっと」の意味と重なると言える。例えば、次の(54)と(55)は「当該事態に変化がない」ということを表す点では共通している。

(54) 少年の頃からそういう風に生きたいと常に考えています。 (= (41))

(55) 少年の頃からそういう風に生きたいとずっと考えています。

一方で、「常に」が用いられた(54)には「ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても(当該事態に変化がない)」という含意があるのに対し、「ずっと」が用いられた(55)にはそのような含意はない。つまり、「ずっと」の場合は当該事態に変化が生じ得る条件が成立するだけの時間幅が確保されるか否かは問題にされない。そのため、この形式は「始まりの時点」の制約を持たず、次のような文においても適格なのである。

(56) さきほどからそういう風に生きたいとずっと考えています。 (= (8a))

5. おわりに

本稿では、「いつも」は生起時や生起回数を問わず話し手による複数回の認識の中で同じ事態が確認されることを表すのに対し、「常に」はある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても当該事態に変化がないことを表すことを明らかにした。このように、両者は意味的に異なるものであるが、次の文においては「いつも」と「常に」のいずれを用いても文意に大差がない。

(57) 毎回のテストで太郎は {いつも / 常に} トップだった。

(佐藤 2017: 5、下線は筆者)

これは、「毎回」との共起が影響している。まず、「いつも」が用いられた場合、「トップだ」という事態の生起時や生起回数は特定されないため、客観的には「トップでない」ということがあり得ることになるが、「毎回」との共起によってその可能性は棄却される。次に、「常に」が用いられた場合、「トップだ」という事態が「毎回」という期間内において変化しないことが表され、「トップでない」ことはなかったということを含意するのである。

以上、本稿では「いつも」と「常に」の意味的相違点を明らかにしたが、一方で、先行研究においてこの両者との関連が指摘されている「絶えず」や「始終」などとの異同など、本稿で扱えなかった問題もある。これについては今後の課題とする。

参考文献

- 池田英喜（1996）「経験をあらわす「シタコトガアル」について」『待兼山論叢 日本学編』30（11），pp.11-26，大阪大学文学部。
- 大塚貴史（2020）「「みんな」に関する諸問題の検討と考察」『筑波日本語研究』（24），pp.67-81，筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室。
- 菊地康人（1983）「バカリ・ダケ」國廣哲彌編『意味分析』pp.57-59，東京大学文学部。
- 工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐる」言語学研究会編『言語学研究会の論文集 ことばの科学 3』pp.53-118，むぎ書房。
- 定延利之（2001）「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1（1），pp.111-136。
- 佐藤琢三（2017）「〈全該当〉を表す語の主観性—取りたて助詞「ばかり」を中心に—」『國語と國文學』94（3），pp.2-16，東京大学国語国文学会。
- 寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味（3）—取りたて助詞について—」『文藝言語研究 言語篇』（6），pp.53-67，筑波大学文藝・言語学系。
- 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版。
- 沼田善子（1992）「とりたて詞と視点」『日本語学』11（8），pp.35-43，明治書院。
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版。
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店。
- 矢澤真人（1987）「頻度と連続—連用修飾成分の被修飾単位について—」『学習院女子短期大学紀要』（25），pp.1-18，学習院女子短期大学。
- 渡辺昭太（2009）「“V 过”と“XはVしたことがある”の意味機能の差異—時間詞との共起関係

を中心に」『言語情報科学』(7), pp.79-96, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.

Sperber, D., & D. Wilson (1995) *Relevance. Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (D. スペルベル・D. ウィルソン『関連性理論—伝達と認知—第2版』内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳, 1999年, 研究者出版)

参考資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ [最終確認日: 2020年5月20日]

『明鏡国語辞典 第二版』(北原保雄編, 2010年, 大修館書店)

おおつか たかし／人文社会科学研究所
(2020年9月18日受理)